



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

妖怪研究

伊東忠太

初出：「日本美術」
1917（大正6）年

妖怪研究

伊東忠太

一 ばけものの起源

えうくわい けんきう い べつ せんもん しら わけ また
妖怪の研究と云つても、別に専門に調べた譯でもなく、又さ

せんもん いな し と かくわたし
ういふ専門があるや否やをも知らぬ。兎に角私 はばけものといふものは

ひぜう おもしろ おも ゐ これ くわん ばくぜん
非常に面白いものだと思つて居るので、之に關するほんの漠然たる

かんさう いさゝ こゝ の す
感想を、聊か茲に述ぶるに過ぎない。

わたし くわん かんが せけん いはゆるばけもの よほど
私のばけものに關する考へは、世間の所謂化物とは餘程

はんゐ こと ま
範圍を異にしてゐる。先づばけものとはどういふものであるかといふに、

ぐわんらいしうけうてきしんねんまた めいしん つく だ
元來宗教的信念又は迷信から作り出されたものであつて、

りさうてきまた くうさうてき あ けいしやう かさう これ きよくたん
理想的又は空想的に或る形象を假想し、之を極端に

こてう けつくわいきほ いげう さう てい これ わたし
誇張する結果勢ひ異形の相を呈するので、之が私のばけものゝ

ていぎ すなは わたし い よほどはんゐ ひろ かいしやく
定義である。即ち私の言ふばけものは、餘程範圍の廣い解釋で

せけん いはゆるばけもの ぶんくわ す こと
あつて、世間の所謂化物は一の分科に過ぎない事となるのである。

せけん くち ばけもの なに
世間で一口 [#ルビの「くち」は底本では「くに」]に化物といふと、何か

えうくわいへんげ まもの いみ きは せんぱく おも
妖怪變化の魔物などを意味するやうで極めて淺薄らしく思はれるが、

わたし かんが ぬ よほどふか いみ あ とく
私の考へて居るばけものは、餘程深い意味の有るものである。特に

げいじゆつてき くわんさつ とき ひぜう おもしろ
藝術的に觀察する時は非常に面白い。

めん きは ゆうだい ぜんうちう はうくわつ しか た
ばけものゝ一面は極めて雄大で全宇宙を抱括する、而も他の一

めん きは びめう ほとん び い さい わた すなは もつと かうゑん
面は極めて微妙で、殆ど微に入り細に渉る。即ち最も高遠

しんわ もつと ひきん とぎばなし ばん がくじゆつ
なるは神話となり、最も卑近なるはお伽噺となり、一般の學術

とく れきしじやう おい また ばんせいくわつじやう おい じつ
特に歴史上に於ても、又一般生活上に於ても、實に

びめう くわんけい いう ぬ も れきしじやうまた
微妙なる關係を有して居るのである。若し歴史上又は

しやくわいせいくわつ うへ とりさ きは
社會生活の上からばけものといふものを取去つたならば、極めて

かんさうむみ かんさうむみ かんさうむみ
乾燥無味 [#「乾燥無味」は底本では「乾燥無味」]のものとなるであらう。

したが われ / \ し し あた しゆみ いか ほうふ
随つて吾々が知らず識らずばけものから與へられる趣味の如何に豊富な

さうざう あま こと たしか
るかは、想像に餘りある事であつて、確 [#ルビの「たしか」は底本では「たか

し」]にばけものは社會生活の上に、最も缺くべからざる要素の

一つである。

せかい れきしふうぞく しら み なにこく なにじだい おい
世界の歴史風俗を調べて見るに、何國、何時代に於ても、

ばけものしさう な ところ けつ な しか ばけもの かんが
化物思想の無い處は決して無いのである。然らば化物の考へは

で き これ けんきう しんりがく れうぶん
どうして出て來たか、之を研究するのは心理學の領分であつて、

われ / \ もんぐわいかん わたし かんが しぜんかい たい
吾々は門外漢であるが、私の考へでは「自然界に對する

にんげん くわんさつ このこんばん おも
人間の観察」これが此根本であると思ふ。

しぜんかい げんしやう み あ
自然界の現象を見ると、或[#ルビの「あ」は底本では「ある」]るものは

ひぜう うつく あ ひぜう おそ あるひ しんぴてき
非常に美しく、或るものは非常に恐ろしい。或は神秘的なものがある

あるひ かわいい これ なに そのおく ゐだい ちから ひそ
り、或は怪異なものがある。之には何か其奥に偉大な力が潜

ゐ さうゐ このゐだい げんしやう おこ にんげんいじやう
んで居るに相違ない。此偉大な現象を起させるものは人間以上

もの にんげんいじやう かたち このさうざう しうけう もと
の者で人間以上の形をしたものだらう。此想像が宗教の基

ばけもの さうざう かつまたにんげん ゆらいかうきしん
となり、化物を創造するのである。且又人間には由來好奇心が

あ このかうきしん しげき くうさう くうさう かさ つひ
有る。此好奇心に刺戟せられて、空想に空想を重ね、遂に

ちんむるゐ かたち さうざう ゆゑ ばけもの かくじだい かくみんぞく
珍無類の形を創造する。故に化物は各時代、各民族に

かなら な こと したが せかい かくこく そのみんぞく
必ず無くてならない事になる。随つて世界の各國は其民族の

さい おう ばけもの ことな ゐ
差異に應じて化物が異つて居る。

二 各國のばけもの

くに こと かくこくみんぞく せんてんせい
ばけものが國によりそれ/"\異なるのは、各國民族の先天性に

またとち ちりてきくわんけい ひぜう だい たと
もよるが、又土地の地理的關係によること非常に大である。例へば

にほん せうたうごく きこうをんわ さんすゐ がい へいぼん
日本は小島國であつて、氣候温和、山水も概して平凡で

べつだんかうがくしゆんれいしんざんゆうたく すべ
別段高嶽峻嶺深山幽澤といふものもない。凡てのものが

せうきも わがくに ゆうだい ばけもの はず
小規模である。その我邦に雄大な化物のあらう筈はない。

こらいわがくに ばけものしさう はなは えうち あるひ ほとん な
古來我邦の化物思想は甚だ幼稚で、或は殆ど無かつたと

い くらゐ にほん しんわ ばけもの でんせつ はなは すくな
言つて可い位だ。日本の神話は化物の傳説が甚だ少い。

にほん かみ / \ にほん そせん にんげん かんが ばけもの
日本の神々は日本の祖先なる人間であると考へられて、化物な

おも ゐ かみ / \ うち べつだんいやう さう
どとは思はれて居ない。それで神々の内で別段異様な相をしたものは

さるたひこのみこと はな たか あまのうづめのみこと かほ
ない。猿田彦命が鼻が高いとか、天鈿目命が顔がをかし

くらゐ またばけものしさう ぐたいてき あら ゑ
かつたといふ位のものである。又化物思想を具體的に現はした繪も

あま おほ きろく あら ほとん な こうにんねんかん
餘り多くはない。記録に現はれたものも殆ど無く、弘仁年間に

やくしじ そうけいかい あらは にほんれいき もつと ふる
薬師寺の僧景戒が著した「日本靈異記」が最も古いものであら

こんじやくものがたり わう / \ ばけものだん で ゐ
う。今昔物語にも往々化物談が出て居る。

にほん ばけもの こうせい ほどおもしろ ゐ これ はじ
日本の化物は後世になる程面白くなつて居るが、是は初め

にほん ちりてきくわんけい ばけもの さうざう よち ため
日本の地理的關係で化物を想像する餘地がなかつた爲である。

そのごしな だうけう えうくわいしさう い ぶつけう とも いんどしさう
其後支那から、道教の妖怪思想が入り、佛教と共に印度思想

はい き にほん ばけもの このため よほどほうふ たと
も入つて來て、日本の化物は此爲に餘程豊富になつたのである。例

いんど め めうわう へん つうぞく めにふだう てうし
へば、印度の三眼の明王は變じて通俗の三眼入道となり、鳥嘴の

かろらわう へん とぎばなし からすてんぐ またにほん せうせつ
迦樓羅王は變じてお伽噺の烏天狗となつた。又日本の小説に

あら まはふづか ふしぎ げい えん おほ はん
よく現はれる魔法遣ひが、不思議な藝を演ずるのは多くは、一半は

ぶつけう　はん　だうけう　せんじゆつ　で　おも
佛 教 から一 半 は 道 教 の 仙 術 から 出 た の と 思 は れ る。

にほん　ばけもの　ひんじやく　たい　しな　い　まつた　ことな
日 本 が 化 物 の 貧 弱 な の に 對 して、支 那 に 入 る と 全 く 異 る、

しな　とほ　ぼうだい　くに　にし　こんろんせつざん　しよぼう
支 那 は あ の 通 り 龍 大 な 國 で あ つ て、西 に は 崑 崙 雪 山 の 諸 峰 が

はてし　つらな　ふか　さんがく　おく　きつとなに　おそろ
際 涯 な く 連 り、あ の 深 い 山 岳 の 奥 に は 屹 度 何 か 怖 し い も の が

ひそ　さうゐ　かんが　きた　だいさばく
潛 ん で ゐ る に 相 違 な い と 考 へ た。北 に は ゴ ビ の 大 沙 漠 が あ つ て、これ に

なに　くわいぶつ　ゐ　かんが　かれら　さばく　く　かせ
も 何 か 怪 物 が 居 る だ ら う と 考 へ た。彼 等 は ゴ ビ の 沙 漠 か ら 來 る 風 は

あくま　といき　かんが　か　しな　むかし　ばけものしさう
惡 魔 の 吐 息 だ と 考 へ た の で あ ら う。斯 く て 支 那 に は 昔 か ら 化 物 思 想

ひぜう　はつたつ　なか　きは　ゆうだい　もつと　じゆけう
が 非 常 に 發 達 し 中 に は 極 め て 雄 大 な も の が あ る。尤 も 儒 教 の

はう　こうし　くわいりきらんしん　かた　きじんえうくわい　と
方 で は 孔 子 も 怪 力 亂 神 を 語 ら ず、鬼 神 妖 怪 を 説 か な い が

だうけう　はう　さかん　これ　しやうだう
道 教 の 方 で は 盛 に 之 を 唱 道 す る の で あ る。



左下 ヤンナ・サリ
 左上 畫像石
 右下 後漢武梁祠
 右上 埃及の神像
 西藏の佛像

かたち あり 形に現はされたもので、もつと ふる おも さんとうしやう
 最 も 古 い と 思 は れ る も の は 山 東 省 の

ぶしし うきぼり けぼり ぶしし これ ごかんじだい その
 武氏祠の 浮彫や毛彫のやうな繪で、是は後漢時代のものであるが、其

ばけもの いづ きゝくわい / \ きは さんかいけう み きは
化物は何れも奇々怪々を極めたものである。山海經を見ても極

くわうたうむけい おほ せうせつ さいいうき いた
めて荒唐無稽なものが多い。小説では西遊記などにも、到る

ところつうれつ ばけものしさう わうえつ む れきし み さいしよ
處痛烈なる化物思想が横溢して居る。歴史で見ても最初から

で く ふくぎし じゃしんじんしゆ しのうし じんしんぎうしゆ
出て来る伏羲氏が蛇身人首であつて、神農氏が人身牛首である。

こ ふう しなじん たいこ ばけもの さうざう ちから ひせう つよ
恂ういふ風に支那人は太古から化物を想像する力が非常に強か

これみなこくど くわんけい こと おも
つた。是皆國土の關係による事と思はれる。

さら いんど ゆ いんど ほとん ばけもの ほんば いんど ちけい
更に印度に行くと、印度は殆ど化物の本場である。印度の地形

しな おな きは かうばく その り やぶ ごと
も支那と同じく極めて廣漠たるもので、其千里の藪があるといふ如き、

かなら むけい げん てんちかいびやくいらいいま ふいつ い
必ずしも無稽の言ではない。天地開闢以來未だ斧鉞の入らざる

だいしんりん いた ところ おううつ む いんどかは こうか だくりう
大森林、到る處に蒼鬱として居る。印度河、恒河の濁流は

ほうやう はて し このゐだい たいしぜん うち なに ひせう
澎湃として果も知らず、此偉大なる大自然の内には、何か非常に

おそ ひそ む かんが じつさいまたねつたいこく
恐るべきものが潜んで居ると考へさせる。實際又熱帶國には

ふしぎ どうぶつ を ふしぎ しよくぶつ これ すこ かたち か
不思議な動物も居れば、不思議な植物もある。之を少し形を變へる

す ばけもの いんど じつ ばけもの ほんば しんせい しし
と直ぐ化物になる。印度は實に化物の本場であつて、神聖なる史詩

とう ばけもの たくさんで く いんどけう で く
ラーマヤナ等には化物が澤山出て来る。印度教に出て来るものは、

いづ ふしぎ ばん めん び かほ てあし むすう
何れも不思議千萬なものばかり、三面六臂とか顔や手足の無数なものとか、

はん にんはんじう はん にんはんてう るお たくさん ぶつけう だい
半人半獸、半人半鳥などの類が澤山ある。佛教の五大

めうわうとう いんどけう きお
明王等も印度教から來て居る。

いんど にしゆ ひぜう さかん れい
印度から西へ行くと、ペルシヤが非常に盛である。ペルシヤには例の

いうめい ばけものたいぢ しんわ れい いうめい
有名なルステムの化物退治の神話があり、アラビヤには例の有名な

えじぶと やう / \ かは
アラビヤナイトがある。埃及もさうである。洋々たるナイル河、

くわうばく さばく これら おほい ばけものしさう はつたつ うなが
荒漠たるサハラの沙漠、是等は 大に化物思想の發達を促

えじぶと かみさま ばけもの たくさん しか これ ぎりしや い
した。埃及の神様には化物が澤山ある。併し之が希臘へ行

よほどことな かへ にほん にく
と餘程異り、却 [#ルビの「かへ」は底本では「かへつ」]つて日本と似て來る。

さんせんふうどきこうとう ちりてきくわんけい しか ところ
これ山川風土氣候等、地理的關係の然らしむる所であつて、

すべ こ を したが ばけもの みなせうきも
凡てのものは小じんまりとして居り、随つて化物も皆小規模である。

ぎりしや かみ みなにんげん はづか ばけ こわ ばけ
希臘の神は皆人間で僅にお化はあるが、怖くないお化である。

それ しんこく いんど ばけもの くら たと
夫は深刻な印度の化物とは比べものにならぬ。例へば、ケンタウルと

あくしん しもはんしん うま かみはんしん にんげん また
いふ惡神は下半身は馬で、上半身は人間である。又ギカント

れうあし へび かみはんしん にんげん れうあし ひつじ
スは兩脚が蛇で上半身は人間、サチルスは兩脚は羊で

かみはん にんげん およ しん ばけもの どこ ぶぶん き
上半が人間である。凡そ眞の化物といふものは、何處の部分を切り

はな しゆいやう げうさう ぜんたい こんぜん しゆ まと
離しても、一種異様な形相で、全體としては渾然一種の纏まつ

かたち な しか ぎりしや ばけもの おほ
た 形 を成したものでなければならない。然るに希臘の化物の多くは

かく ごと つぎあは もの ゆゑ しん ばけもの い でき
斯の如く繼合せ物である。故に眞の化物と言ふことは出来ないので

しか きたようろつば はうめん みや このはうめん つい
ある。然らば北歐羅巴の方面はどうかと見遣るに、此方面に就て

わたし あま おほ し えう えうちきは きぼ
は 私 は 餘り多く知らぬが、要するに幼稚極まるものであつて、規模が

きは ちい ようろつば ばけもの おほ
極めて小さいやうである。つまり歐羅巴の化物は、多くは

とうやうしさう かんくわ う おも
東洋思想の感化を受けたものであるかと思ふ。

いじやうの ところ そうくわつ ばけものしさう ところ もつと
以上述べた所を總括して、化物思想はどういふ所に最

おほ はつたつ かんが み ばけもの ほんば ぜひねつたい
も多く發達したかと考へて見るに、化物の本場は是非熱帯でなけ

こと わか ねつたいちほう しぜんかい きは ゆうだい
ればならぬ事が分る。熱帯地方の自然界は極めて雄大であるから、

しさう しぜん しんこく ねつたい たしんけう しん
思想も自然に深刻になるものである。そして熱帯で多神教を信ずる

くに おい もつと しんこく ばけものしさう はつたつ こと い
國に於て、最も深刻な化物思想が發達したといふ事が言へる。

たとへねつたい たしんけうこく ばけもの はつたつ たと
縦令熱帯でなくとも、多神教國には化物が發達した。例へば

ちべつと ごと そのらまけう ひじやう えうくわいてき しうけう
西藏の如き、其喇嘛教は非常に妖怪的な宗教である。

かやう いんど あらびや べるしや ひがし にほん にし
斯様にして印度、亞刺比亞、波斯から、東は日本まで、西は

ようろつば ばけもの そうくわつ み ばけもの さくげんち あじあ
歐羅巴までの化物を總括して見ると、化物の策源地は亞細亞の

なんばう わか
南方であることが分るのである。

なほばけもの ひつえうぜうけん ぶんくわ ていど ひぜう みつせつ
尚 化物に一の必要條件は、文化の程度と非常に密接の

くわんけい いう こと ばけもの さうざう こと り ぜう
關係を有する事である。化物を想像する事は理にあらずして情

り はし ばけもの はつたつ たとひばけもの で それ
である。理に走ると化物は發達しない。縱令化物が出ても、其は

りせいてき かんさうむみ ぜうてき よいん ふく ゐ
理性的な乾燥無味なものであつて、情的な餘韻を含んで居ない。

したが すこ おもしろみ な ゆゑ ぶんうん はつたつ く しぜん
随つて少しも面白味が無い。故に文運が發達して來ると、自然

ばけもの な く ぶんくわ はつたつ く しぜんどこ ばくぜん
化物は無くなつて來る。文化が發達して來れば、自然何處か漠然と

ちき お ゐ おもしろ ばけものしさう い よち な
して稚氣を帯びて居るやうな面白い化物思想などを容れる餘地が無くなつて

く
來るのである。

三 化物の分類

いじやう だいたいばけもの がいろん の これ ぶんるゐ み
以上で大體化物の概論を述べたのであるが、之を分類して見

るとどうなるか。之は 甚 だ六ヶしい問題であつて、見方により 各

ことな わけ ま さしあた しゆるゐ うへ ぶんるゐ の
異なる譯である。先づ差當り種類の上からの分類を述べると、

しんぶつ しゃうたい ごんげ
(一) 神佛 (正體、權化)

ゆうれい いきれう しれう
(二) 幽靈 (生靈、死靈)

ばけもの あくぎ ため ふくしう ため せいれう
(三) 化物 (悪戯の爲、復仇の爲) (四) 精靈 (五)

くわいどうぶつ
怪動物

の五となる。

(一) の神佛はまともなものもあるが、異形のものも多い。そして神佛は

往々種々に變相するから之を分つて正體、權化の二とする

ことが出来る。化物的神佛の實例は、印度、支那、埃及方面

に極めて多い。釋迦が[#「釋迦が」は底本では「釋迦か」] 既にお化けである。

卅二相を其儘現はしたら恐ろしい化物が出来るに違ひない。

印度教のシヴァも隨分恐ろしい神で

ある。之が權化して千種萬様の變化を試みる。ガネーシヤ即ち

聖天様は人身象頭で、惡神の魔羅は隨分思ひ切つた不可思議な

相貌の者ばかりである。埃及のスフィンクスは獅身人頭である。

埃及には頭が鳥だの獸だの色々の化物があるが皆此内

である。此(一)に屬するものは概して神祕的で尊い。

化物の分類の中、第二の幽靈は、主として人間の靈魂で

あつて之を生靈死靈の二に分ける。生[#ルビの「い」は底本では「き」] きな

がら魂が形を現はすのが生靈で、源氏物語葵の巻の六

でうみやすみどころいきれうごとすなはそれひだかがはきよひめ

などは、生きながら蛇になつたといふから、之も此部類に入れても宜い。

しれう しご たましひ いげう すがた あら れい ひぜう おほ
死靈は、死後に 魂 が異形の 姿 を現はすもので、例が非常に多い。

そのあら かた みなもくてき よ こと そのもくてき およ わか
其現はれ方は皆 目的に依つて異なる。其目的は凡そ三つに分

でき うらみ ほう ため ばんこわ おんあい ため
つことが出来る。一は 怨を報ずる爲で一番怖い。二は 恩愛の爲で

むし じゆつくわいてき れい かぞ いとま
寧ろいぢらしい。三は 述懐的である。一の例は數ふるに 違がない。

うたい うとう あこぎ うがひ そのてきれい
二では 謠の「善知鳥」など、三では「阿漕」、「鶉飼」など其適例であ

ゆうれい がい ぜんたい せいしつ いんき すご さうぼう
る。幽靈は概して全體の性質が陰氣で、凄いものである。相貌

にんげん たいさ
なども人間と大差はない。

だい ばけもの ほんたい どうぶつ そのもくてき あくぎ ため
第三の化物は本體が動物で、其目的によつて悪戯の爲と、

ふくしう ため わか あくぎ ほう いか むじやき きつね たぬき
復仇の爲とに分つ、悪戯の方は如何にも無邪氣で、狐、狸の

あくぎ いつ ひと わら たね いか やうき こつけいてき
悪戯は何時でも人の笑ひの種となり、如何にも陽氣で滑稽的である。

おほにふだう めこそう しか ふくきう ほう なべしま
大入道、一目小僧などはそれである。併し復仇の方は鍋島の

ねこさうどう ずゐぶん
猫騒動のやうに随分しつこい。

だい せいれう ほんたい しぜんぶつ このせいれう もつと
第四の精靈は、本體が自然物である。此精靈の最も

しんせい だい しんぶつ ぶい たと にほんこくど たましひ
神聖なるものは、第一の神佛の部に入る。例へば日本國土の魂

おほくにたまのみこと かみ ごと もの たましひ
は大國魂命となつて神になつてゐる如きである。物に魂があ

さうざう むかし だい さんがくかかい せう ぼん
るとの想像は昔からあるので、大は山岳河海より、小は一本の

くさ だ はな みなたましひ さう / " \ すなは
草、一朵の花にも皆 魂 ありと 想 像 した。 即 ち

すみぞめのさくら さくら げんだう やなぎ そのれい これら
「 墨 染 櫻 」の 櫻 「三十三 間 堂」の 柳、など 其 例 で、此 等

すこ こわ きは いうび
は 少 しも 怖 なく、 極 めて 優 美 なものである。

だい くわいどうぶつ にんげん さうざう ねつざう にほん
第 五 の 怪 動 物 は、人 間 の 想 像 で 捏 造 したもので、日本 の

ぬえ ぎりしや および とうこれ ぞく りうきりんとう
鶴、希 臘 のキミーラ 及 グリフィン 等 之 に 屬 する。 龍 麒 麟 等 も

このなか い おも てんぐ いんど とり やはり
此 中 に入 るもの と 思 ふ。 天 狗 は 印 度 では 鳥 としてあるから、 矢 張

このうち い このだい ぞく がい おもしろ い
此 中 に入 る。 此 第 五 に 屬 するものは 概 して 面 白 いものと言ふことが

でき
出 來 る。

いじやう がいくわつ そのとくしつ あ しんぶつ たうと
以 上 を 概 括 して 其 特 質 を 擧 げると、 神 佛 は 尊 いもの、

ゆうれい すご ばけもの おか せいれう むし うつく
幽 靈 は 凄 いもの、 化 物 は 可 笑 しなもの、 精 靈 は 寧 ろ 美 しいもの、

くわいどうぶつ おもしろ い う
怪 動 物 は 面 白 いものと言ひ得る。

四 化物の表現

これらさま / " \ ばけものしさう ぐたいくわ はうはふ もつ
此 等 様 々 の 化 物 思 想 を 具 體 化 するの に どういふ 方 法 を 以 て

ゐ とき くに おの / \ こと がい
して居るかといふに、 時 により、 國 によつて 各 々 異 なつてゐて、 一 概 に

だんてい こと でき たと てんぐ いんど しな にほんみな
斷 定 する 事 は 出 來 ない。 例 へば 天 狗 にしても、 印 度、 支 那、 日本 皆

そのあら かた こと ゐ りう せいやう いんど
其 現 は し 方 が 異 なつて居る。 龍 なども、 西 洋 のドラゴンと、 印 度 のナ

しな りう ひせう あらは かた ちが しか すべ けうつう
一 ガーと、 支 那 の 龍 とは 非 常 に 現 し 方 が 違 ふ。 併 し 凡 てに 共 通 し

しゆはふ ほうしん ゆらいばけもの けいたい なんら ふしぜん かしよ
た手法の方針は、由來化物の形態には何等か不自然な箇所が

ある。それを げいじゆつ ちから しぜん くわ だい / \ ほうしん
ある。それを藝術の方で自然に化さうとするのが大體の方針ら

たと び くわんのん もと / \ おほばけもの しか そのたくさん
しい。例へば六臂の觀音は元々大化物である、併し其澤山

て だ かた くふう そのて ぐあひ おか かへ たうと
の手の出し方の工夫によつて、其手の工合が可笑しくなく、却つて尊く

み けつ こつけい み へた こゝ げいじゆつ
見える。決して滑稽に見えるやうな下手なことはしない。此處に藝術の

ぬだい ちから
偉大な力がある。

このぬだい ちから ぶんかい み ぼう ひぜう こてう ぼう
此偉大な力を分解して見ると。一方には非常な誇張と、一方に

ひぜう しゃうりやく かくろん い ばけもの へうげん
は非常な省略がある。で、これより各論に入つて化物の表現

すなは けいしき ろん じゆんじよ いま そのひま も
即ち形式を論ずる順序であるか、今は其暇がない。若し

ばけものがく かくもん いま の こと そのじよろん
化物學といふ學問がありとすれば、今まで述べた事は、其序論と

み こゝ たゞじよろん の こと
見るべきものであつて、茲には只序論だけを述べた事になるのである。

えう ばけもの けいしき せいやう たい えうち ぎりしや
要するに、化物の形式は西洋は一體に幼稚である。希臘や

えじふと おほ にんげん どうぶつ つぎあは ゐ こと まへの
埃及は多く人間と動物の繼合せをやつて居る事は前に述べたが、

かたち たくみ でき いはゆるくわんぜん ばけもの い
それでは形は巧に出来ても所謂完全な化物とは云へない。ロー

マネスク、ゴシツク時代になると、餘程進歩して一の纏まつたものが出来て來

たと ぱり じたふ いうめい くわいぶつ つぎあはせもの
た。例へば巴里のノートルダムの寺塔の有名な怪物は繼合物で

はなくて立派に纏まつた創作になつて居る。ルネツサンス以後は論ずるに足

らない。然るに東洋方面、特に印度などは凡てが渾然たる立派

な創作である。日本では餘り發達して居なかつたが、今後發達させ

ようと思へば餘地は充分ある。日本は今藝術上の革命期に

際して、思想界が非常に興奮して居る。古今東西の思想を

綜合して何物か新しい物を作らうとして居る。此機會に際し

て化物の研究を起し、化物學といふ一科の學問を作り出した

ならば、定めし面白からうと思ふのである。昔の傳説、様式を

離れた新化物の研究を試みる餘地は屹度あるに相違ない。(完)

(大正六年「日本美術」)

底本：「木片集」萬里閣書房

1928（昭和3）年5月28日発行

1928（昭和3）年6月10日4版

初出：「日本美術」

1917（大正6）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：しだひろし

2007年11月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。